

当クリニックにおける咬合治療患者に関する臨床統計

○並松 諒, 田村香里, 宮内英里, 柚木園藍,
前野孝枝, 石谷徳人
(医) イシタニ小児・矯正歯科クリニック)

【目的】

近年、小児齲蝕は減少し、小児歯科においてはより包括的かつ継続的な管理を実践することが求められている。当クリニックでは、継続的な口腔管理の中で起こる様々な歯科的問題について口腔管理の見取図（マイ・マネージメントマップ）を活用しているが、包括的・継続的管理の一つである咬合治療は、その中で最も大きな介入となる。今回、当クリニックの咬合治療患者について動態推移を把握する目的で比較検討を行ったので報告する。

【対象と方法】

対象は当クリニックにおいて過去10年間に咬合治療を開始した患者632名（男子240名、女子392名）である。主訴や咬合治療を開始した経緯などについて調査を行った。

【結果】

治療開始年齢は7歳が143名（22.6%）と最も多く、次いで8歳が137名（21.7%）、9歳が86名（13.6%）の順であった。開始理由（複数回答可）は叢生が462名（73.1%）と最も多く、次いで反対咬合が128名（20.3%）、上顎前突が55名（8.7%）であった。咬合治療を開始するまでの経緯としては、初診時に歯列・咬合を主訴として来院し、その後治療を開始した者が369名（58.4%）であり、そのうち約7割が3か月未満で治療を開始していた。歯列・咬合以外の主訴で来院し定期検診での管理を経て咬合治療を開始した者は263名（41.6%）であり、そのうち約8割が2年以上の定期管理を経て咬合治療を開始していた。

【まとめ】

小児期から継続的に定期管理を行うことで、齲蝕のみならず口腔内全体の問題を患児や保護者と共有し、適切な時期に適切な介入を行うことができたと考えられる。今後も患者に寄り添う中で、包括的な口腔管理のサポートに努めていきたい。

上下顎両側に第一大臼歯の異所萌出を認めた一例

○本多祥子, 山口 登
(くるめ東町歯科医院)

【目的】

本症例は上下両側に第一大臼歯の異所萌出を認めた稀な症例で、3Dリンガルアーチを用いて動的咬合誘導を行い良好な経過を得ているので報告する。なお、本発表に際して保護者と患児に説明した上で同意を得ている。

【症例・治療経過】

初診（平成29年10月7日）年齢：8歳0か月、男児

主訴：6歳臼歯がなかなか生えてこない。

現症：上下顎両側第一大臼歯は未萌出であった。下顎右側第二乳臼歯は脱落が近く、左側第二乳臼歯は動揺を認めた。エックス線診査にて、下顎両側第一大臼歯が近心傾斜して第二乳臼歯の遠心部を吸収しながら萌出してきていた。上顎両側第一大臼歯は低位にあり、第二乳臼歯の遠心部を吸収しながら萌出しようとしていた。永久歯の歯胚数に過不足は認められない。

診断：両側上下第一大臼歯の異所萌出

経過：平成29年11月、下顎両側第一大臼歯の開窓を行い、萌出を誘導した。右下第二乳臼歯は自然脱落したが、平成30年1月に左下第二乳臼歯は抜歯を行い、第一大臼歯の萌出誘導を行った。同年4月に術前検査後、3Dリンガルアーチを下顎に装着した。現在、同装置にて、両側下顎第一大臼歯のアップライトと第二小臼歯の萌出スペースの確保を行っている。

【結果および考察】

現在、臼歯部の咬合は幾分確保できたが、依然として第一大臼歯の咬合はとれていない。第一大臼歯の正常な咬合状態の確保が目的であるが、上顎両側第一大臼歯の萌出にはまだ時間がかかると思われる。家族歴で患児の母親にも同様の傾向があり、上下ともに小さな顎骨、第一大臼歯歯胚の位置異常および第一大臼歯の萌出方向の異常などが遺伝的に影響している可能性が考えられる。